

井上百合

〈52〉

いろいろな経験を積んで
また日田に戻ってきて



YURI INOUE

1965年生まれ。日田高卒。京都の短大に進み、福岡の企業に就職した。結婚し東京在住後、2014年3月に帰郷。実家の井上酒造で、専務取締役兼杜氏見習いとして、「日田らしい酒」造りに取り組む。

三隈川の川面に映る夕日、杉の木立からのぞく澄んだ星空。最初目に入ったのは、高校時代には気がなかつた日田の自然の美しさだった。そして何より、30年ぶりに戻ると旧友たちは温かった。「何十人も集まって来て、よく帰って来たねって。人の付き合ひの濃密さ、それもふるさとの良さでしょね。都会暮らしがあつたからこそ感動だろ。」

小さい頃から、酒の香りに包まれて育つた。「大人になつたら家業を継ぐもの」との思いはいつも心にあつた。それでも親の勧めもあり京都の短大に進学後、福岡市の会社に就職。米田留学などを経て、会社で知り合った男性と25歳で結婚した。「いずれは一緒にふるさとで酒造会社を継ぎたい」。そんな思いも告げていたが、夫が本社のある東京に栄転、会社で重要なポストに就くにつれて言い出し

にくくなつていた。

専業主婦として東京で暮らし、帰郷をあきらめかけていた時、20歳を迎えた娘から「話がある」と食事に誘われた。「これまで育ててくれてありがとう。今帰らなかつたら一生後悔すると思う。これからはママの人生を歩んでほしい」。蓋をしていた思いがあふれてきた。別居も考えたが「井上酒造は『井上』の姓で継がなければ。中途半端な思ひは捨てたい」。そう決意した。

2014年3月に帰郷。専務として「静かにおしゃれに輝く会社」を目指した経営を考へる一方、杜氏見習いとして修業を積み毎日だ。「昔ながらの風味漂う酒を造りたい」と自社の田んぼで米作りから始めた。初年度は失敗したが、2015年の米で作つた日本酒「百合仕込み」は周囲の協力もありいい出来に仕

上がった。「自分が手掛けた酒を飲むお客さまの姿を見たときが一番の幸せ」と語る。

日田は都会に比べて仕事も少なく給料も安い。高校を卒業した後学べる場も少ない。「私は家があり家業があつたから戻つてこられた」。若い人に日田に残り、日田に戻ってきてもらうには、企業側の努力、行政の支援が必要と感ずる。

おいしい食べ物に豊かな自然や文化・歴史。そして何より、人の温かき。日田の良さは数えだしたらきりが無い。だがそれは一度、外の世界を経験したからこそとも思ふ。

「日田は福岡都市圏にも近く、インターネットを開けばさまざまな情報も手に入る時代。若い人たちには一度外に出たとしても、いろいろな経験を積んでまた日田に戻ってきてほしい。そして一緒にふるさとを盛り上げていきたいらうらしい」。